

## クオリアについての表象理論の擁護 -二つの反論の検討-

若林佑治(Yuji Wakabayashi)

東京大学総合文化研究科

---

本発表では、クオリアについての表象理論（以下、表象理論）に向けられた二つの反論、「表象内容を超えるクオリア」(Block 1996, Rey 1998) と「逆転地球」(Block 1990) を検討し、それらの反論からの表象理論の擁護を試みる。

表象理論は、クオリアを表象の観点から説明する理論であり、物理主義の枠組みの中でクオリアを還元的に説明できる唯一の理論であると考えられている。表象理論によれば、クオリアは表象内容、すなわち表象された対象の表象された性質である。太郎が赤いトマトを見ている時、それに対応して太郎の視野には赤色をした領域（赤さのクオリア）が存在している。表象理論によれば、この時太郎は視覚的にトマトの赤さを表象しており、太郎の視野の赤色をした領域の赤さは、表象されたトマト自身に備わる赤いという性質に他ならない。このように、クオリアを表象された性質とすることによって、クオリアを非物理的で心的な存在としてではなく、物理的な存在として理解することができる。

表象理論は、クオリアを還元的に説明できるという利点を持つ一方で、いくつかの反論に直面している(Lycan 2015)。本発表では、その中から二つの反論を取り上げて考察する。第一の反論は、表象内容によっては捉えられないクオリアの存在を主張するものである。痛みの経験は身体の位置を表象するかもしれないが、痛みの経験に含まれる質的な感じ（痛みのクオリア）はそのような表象内容に尽くされるようなものではない(Block 1996)。また、意気揚々とした気分や不安は表象された対象の性質ではない(Rey 1998)。第二の反論は、Block(1990)による逆転地球の思考実験である。逆転地球は二つの点で、地球とは異なっている。一つ目の点は、ものの色である。逆転地球では、ものの色が地球に対して反対色に逆転している。例えば、地球においてのトマトは赤いが、逆転地球においてのトマトは緑である。二つ目の点は、色に対して適用される言語である。逆転地球では、色の言語も地球に対して逆転している。例えば、地球においては緑色を表すのに「みどり」という言語が用いられるが、逆転地球においては緑色を表すのに、「あか」という言語が用いられる。このような状況のもとで、地球人である太郎が、色を逆転させるレンズを装着した上で、逆転地球に行き、以降そこで生活することを考える。レンズを装着した太郎が逆転地球に到着したとき、レンズのおかげで太郎は色の

変化に気づかない（地球にいた時と同様に、太郎にとって空は青く見え、トマトは赤く見える）。そこで太郎は色について尋ねられると、空は青いと言ひ、トマトは赤いと言うので、逆転地球に住む逆転地球人たちからすると、太郎は自分たちと全く変わらないように見える。しかし、実際には太郎の知覚は誤っている（逆転地球では、空は黄色く、リンゴは緑である）。ここで、表象理論に従えば、表象内容は世界のあり方によって決まるため、太郎の知覚の表象内容は、やがて世界のあり方に合わせて変化するはずである。つまり、いずれ空は黄色として表象され、リンゴは緑色として表象されるようになる。しかし、私たちの直観に従えば、クオリアは世界のあり方ではなく脳のあり方によって決まるため、太郎がどれだけ逆転地球で過ごしても、色のクオリアは変化しない。従って、直観が正しければ、クオリアと表象内容との間にズレが生じることになり、表象理論は誤りとなる。

第一の反論に対しては、痛みなどの感覚や、不安などの気分の場合にも、対応するクオリアは表象内容だけで十分に説明できるという応答(Tye 1995)と、表象内容だけでは不十分であり、クオリアは部分的には機能的に説明されるという応答(Lycan 1998)がなされている。後者の応答は、クオリアには表象内容を超える側面があることを認めることになるため、表象理論としては不徹底である。したがって、発表者は前者の応答を擁護する。第二の反論に対しては、二通りの応答が存在する(Lycan 2015)。一つは、太郎の色知覚における表象内容は逆転地球での生活を経ても変化しないと主張するもので、もう一つは、クオリアは脳状態によってではなく世界のあり方によって決まり、表象内容の変化に従って変化すると主張するものである。現状では、多くの哲学者は後者の応答を採用しているが、その場合クオリアは逆転地球での生活を経ても変化しないという極めて強力な直観を放棄することになるため、発表者は前者の応答の擁護を試みる。